



オーダーメイド医療の将来

コーディネーター

青野 由利

シンポジウム

2003年度から5ヵ年計画で実施された文部科学省の「オーダーメイド医療実現化プロジェクト」が今年の3月で終了し、事実上の第2期プロジェクトが始まった。第1期プロジェクトでは、約20万人(約30万症例)分のDNA、血清、診療記録が収集され、「バイオバンク」として構築された。今後は、このバンクをいかにうまく利用していくかが課題となる。そのためには、第1期の成果と課題を整理し、今後に生かしていくことが重要だ。一般市民や協力者に対する説明と成果の

フィードバックも欠かせない。現在、DNAシーケンスの技術が急速に進んでおり、個人個人の全ゲノムを解読することも夢物語ではなくなってきている。実際、DNAの二重らせん構造の発見者の一人であるジェイムズ・ワトソンの全ゲノムが解読され、公表されている。こうしたことが可能になると、これまでとは異なるデータ処理や、倫理問題への対処が必要となるだろう。そうしたことも含め、オーダーメイド医療の現状と将来について考えたい。

プロフィール

毎日新聞社 論説委員(科学環境部編集委員兼務)

科学、医学、環境などの分野を担当。

著書に『生命科学の冒険—生殖・クローン・遺伝子・脳—』(ちくまプリマー新書)、『遺伝子問題とは何か—ヒトゲノム計画から人間を問い直す—』(新曜社)など。

